



TITLE:

京都大学言語学懇話会 1992年度活動報告

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学言語学懇話会 1992年度活動報告. 言語学研究 1992, 11: 285-293

ISSUE DATE:

1992-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87963>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会
1992年度活動報告

第28回例会

1992年4月18日(土) 午後1:30~4:45

芝蘭会館研修室

研究発表

「タイムイル半島(シベリア)のドルガン族とその言語

— 調査報告 —」

藤代 節(研修員)

海外調査報告

「モンゴルとその言語」

橋本 勝(大阪外国語大学)*

第29回例会

1992年7月18日(土) 午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

「日本語の終助詞「ね」をめぐる諸問題」 北野 浩章(研修員)

「膠着言語における形態論と統語論の

相互作用に関する研究に向けて」

塚本 秀樹(愛媛大学)

第8回大会(第30回例会)

1992年12月5日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館211号室

研究発表

「日本語の音節構造とリズムについて」 岩井 康雄(D1)*

「フランス語における文体的倒置構文について」

藤田 健(D1)*

「一致と格理論」

橋本喜代太(研修員)

「再帰文脈について — 統語論と形態論の接点 —」

中村 裕昭(海上保安大学校)*

「タミル語の -a 形容詞について」

家本 太郎(京都大学)

「アラビア語ジバーリ部族方言(南シナイ)の空間概念語彙について

— フィールド調査報告 —」

西尾 哲夫(東京外国語大学AA研)

*本誌掲載の同著者による論文、海外調査報告を参照。

藤代 節

1991年8月1日～8月26日に訪れたドルガン族の村々での見聞をスライド映写を主として報告した。1989年の調査によるとタイムイル半島に住むドルガン族は4939人である。人口400～700人程度の村落を形成して住んでいる。タイムイル半島以外にはヤクーチヤの北西部等にも2000人位住んでいる。言語の保存状況は村落による差異はあるが他のシベリアの少数民族に比べてかなり良好であるといえる。中年層以下はソビエト政権によるコルホーズ、ソホーズを中心とした生産共同体建設時以来の現代ロシア語教育の浸透によりほぼ完全にロシア語も解する。家庭内ではドルガン語を専ら使用しているため若年層にも民族の言語が引き継がれてはいる。とはいえ、シベリアにおいては、民族言語しか使用しない老年層との世代交替が進み急速に民族言語が失われた例には事欠かないことを思えばドルガン語の行く末も案じられる。しかし、現在ではドルガン族の村では主として民族出身者が教職に就いており、近年創設されたタイムイル民族教育アソシエーションが民族言語教育の初等読本や辞書類の出版を推進しつつあることは今後のドルガン族が自らの教育全般について主導権を握る可能性が出て来たという点で見逃せない事実である。

ドルガン語はチュルク系言語、ヤクート語の方言とされることもある。ドルガン族はシベリアの複数の民族により比較的新しい時代に形成された民族であり、以前はヤクート族やツングース系やサモエド系の諸民族とも密なつながりがあったと考えられるが、現在では行政区画により隔てられたためか、かつての交流が分断された状態にあると見ることもできる。報告者は系統を異にする言語間の言語接触の在り様についてシベリアの諸民族言語に興味を持っているがこの問題については民族の動きを遡ってとらえることが肝要であるし、逆に現在の諸民族の言語を比較検討すれば民族の接触状況について明らかになる点多かろうと考えている。実際に民族の言語と自然環境に触れることが出来て幸いであった。

尚、つい2、3年前まで外国人は立ち入りが難しく、国内人にもビザの取得が必要な閉鎖地区であったタイムイル民族自治区において比較的容易に移動・調査等に当たることが出来たのはサンクト・ペテルブルグにある国立レニングラード教育大学（現・国立ロシア教育大学）極北諸民族学部の教官、学生の皆さんの協力を得ることが出来たからであることを申し添えたい。この学部ではシベリア全域から教員免許取得を主目的に少数民族出身の学生が集まり、26に及ぶ少数民族言語の教育法が研究されている。（ふじしろせつ・学術情報センター）

北野 浩章

日本語の終助詞「ね」の機能については、(1)発話内容が、話し手と聞き手の共有知識であるときに用いられるという説、(2)発話内容が確かにそうであると話し手が確認しつつ述べていることを示すという説がこれまで主張されている。

本発表ではこれら先行研究を参考にしつつも、「ね」の持つ根源的な機能を「聞き手に確認を求めること」とした。「ね」の付いた文は典型的な陳述文でも質問文でもなく、両者の中間的な性質を持ち、不確かな内容を発話しつつ、聞き手に確かめるような発話行為を遂行するのである。「ね」の持つニュアンスを分かりやすく表せば「私はこう思うが、どうですか」とでもパラフレーズできよう。ただ、確認を求める力の強さは様々である。例えば、

(1)お子さんは三人ですね。

という発話は内容の真偽を確認する解釈が最も自然であり、確認の力は強いと考えられる。一方、

(2)今日はいい天気ですね。

の場合、内容の真偽より、発話の妥当性を問うとでも言うべき発話であり、確認の力は弱いと言える。さらに、次の発話のように、

(3)理想の女性は。 — やっぱり、しとやかで優しいひとですね。

聞き手に確認を求めているとは言えない場合も、「私はこう思うが、どうですか」という基本的な意味が働いている。すなわち、「ね」がない場合のような、聞き手に対する直接的・独断的な言い回しを避け、あたかも聞き手におうかがいをたてながらの発話であるかのような効果が「ね」によって作られるのである（聞き手尊重の「ね」）。

聞き手への確認を「ね」の基本的な意味と考えれば、話し手にとって既定の事実を聞き手に確認するようなことがあり得ないのは当然である。

(4)お生まれはどちらですか。 — *大阪ですね。

また、伝聞の「そうだ」によって表されるのは不確かな事実であるから、確認の力が強い解釈が普通である。そのため、次のように確認をするのに不適当な文脈では「ね」は不自然である。

(5)田中君はまだいるかね。 — *もう帰ったそうですね。

このように多くの興味深い事実が説明できるが、まだ残された問題も多く、今後さらに研究を深める必要がある。

(きたのひろあき、研修員)

塚本秀樹

本発表は、日本語、朝鮮語、トルコ語などの膠着言語と呼ばれる言語において形態論と統語論がどのように相互作用し、各言語間における相違が理論的枠組みを構築する際にどう係わってくるか、ということの解明を目指すものである。

日本語では、基底のレベルにおいて母型文の下に補文が埋め込まれた複合構造を仮定できる構文が比較的多くの種類にわたって見出されるのに対して、朝鮮語とトルコ語では、そのような構文は極めて限られている。その中でも三言語に共通して一応は複合構造が仮定できる構文に使役構文がある。日本語では、使役構文の埋め込み文を対象として再帰代名詞化、副詞類の修飾、「そうする」置換などの統語現象が生じ得るのに対して、朝鮮語とトルコ語では、そういったことは全く起こらない、ということが調査の結果わかった。また、使役の接辞は、日本語では生産的であるが、朝鮮語では非生産的であり、トルコ語では朝鮮語ほどではないにしてもかなり非生産的である。このようなことから、使役構文について日本語では複合構造を設定してもかまわないが、朝鮮語とトルコ語では複合構造を設定する必然性はなく、単一構造で事が運ぶ、という帰結が得られる。

三言語とも使役構文に複合構造を仮定したとしても、上述のように朝鮮語とトルコ語では埋め込み文における統語現象の生起はないので、文法記述・説明をするのに埋め込み文についての情報は要らないのに対して、日本語では埋め込み文において種々の統語現象が生起するので、文法記述・説明にとって埋め込み文についての情報が多分に要求される。従って、派生的語形成が語彙挿入の前に行われるとする「語彙分析」を適用すると、朝鮮語とトルコ語についてはすっきりとうまくいくが、日本語については込み入っており、無理がある。また、「動詞繰り上げ分析」の適用の場合には、変形規則の存在に対する正当化の問題や、朝鮮語とトルコ語も日本語と同様に複合構造を設定して扱ってよいのか、といった疑問が出てくる。

使役構文の場合とよく似た事情を提示するものとして、複合動詞文を挙げることができる。日本語では、アスペクト表現にも「動詞の連用形＋動詞」という語彙的な複合動詞と同一の形態が用いられ、これらは統語的な複合動詞と言える。それに対して、朝鮮語では、日本語と同様に「動詞の連用形＋動詞」という語彙的な複合動詞は存在するが、アスペクト表現には複合動詞は用いられず、従って統語的な複合動詞はない。また、日本語と朝鮮語の他にトルコ語、モンゴル語、満州語といった膠着言語における複合動詞文の様子についても若干言及し、最後に今後の研究の課題や方向性について述べた。

(つかもと ひでき、愛媛大学)

家本 太郎

ドラヴィダ語学において、形容詞をそれぞれの言語の文法体系の中で如何に位置づけるかは最も議論の多い問題の一つである。本発表では、タミル語の形容詞形成接辞 -a の来源を、古タミル語で最も体系的な文法範疇であった人称名詞（代名詞化名詞）の3人称複数中性表示接尾辞にもとめる従来の説(Andronov 1972, Zvelebil 1977)を批判し、当該接尾辞が本来的にタミル語に存在していたとする仮説を提出した。

先ず、サンガム文献（後サンガム文献を含む）における、42語彙項目の -a 形容詞および人称名詞3人称複数中性表示接尾辞の出現頻度数の調査を行った。その結果、双方の形式は、最古層に属するテキストにおいても観察されること、および、それらが古代タミル語史を通じて、生産的であり、前者の来源を後者に求めるAndronov やZvelebil の見解は整合性をもたないとの知見を得た。すなわち、-a形容詞は後代の発展形式ではなく、本来的にタミル語に存在した。出現頻度による論証に加え、報告者は、人称名詞に用いられる人称接辞における短母音と長母音の交替現象に注目し、後代になるに従

	-a 形容詞	人称名詞 3pl.nt. -a
1. Ainkurunūru	16	38
2. Kūrontokai	16	33
3. Nacripai	27	46
4. Patiruppattu	5	9
5. Akanāgūru	63	80
6. Puṇanāgūru	43	64
7. Perumpāṇāruppatai	2	2
8. Paṭṭipālai	2	3
9. Kuriṇippaṭṭu	2	2
10. Malaipatukāṇ	9	8
11. Netunaiṭṭai	3	1
12. Maturaikāṇai	7	12
13. Mullaipāṭṭu	1	0
14. Cūṭpāṇāruppatai	3	0
15. Paṭipātai	16	17
16. Kalittokai	31	32
17. Tirumukāruppatai	4	2
18. Tolkāppiyam	24	14
19. Tirukkural	21	33
20. Nāṭaiyār	27	19
21. Maṇimēkalai	19	30
22. Cilappatikāram	14	5
	355 (41.5%)	501 (58.5%)

い、長母音をもつ形式が増える傾向にある事実を、-a形容詞に人称接辞が付加された形式の一般化として解釈した。-a 形容詞に a-で始まる人称接辞が付加された結果、ā-をもつ形式が生まれたとする仮説である。更に、-a + a-> ā-が挿入わたり音を伴った-a + a-> ava-として再解釈され、この形式が現代タミル語にまで存続しているparticipial noun（分詞的名詞）に発展した可能性についても指摘した。

Iemoto, T. (forthcoming) "Re-examination of -a Adjectives in Old Tamil",
In. Nara, T. (ed.) Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project 4.
ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. (いえもと たろう、京都大学)

アラビア語ジバーリ部族方言（南シナイ）の空間概念語彙について
ーフィールド調査報告ー

西尾 哲夫

I. はじめに

(1) ジバーリ部族について (jbālī < CLA jibālī cf. jibāl pl. of jabal 「山」)

a. セント-カトリヌの修道院に奉仕させるために、ユスティニアヌス I 世によってボスニア（ユーゴスラビア南西部）、ワラキア（ルーマニア南部）及びアレキサンドリア（エジプト）から強制移住させられた二百家族あまりの農奴たちの子孫。移住時の言語は、恐らくギリシア語の方言。

II. ジバーリ部族方言の構造と系統

(1) 音韻的特徴

- a. 子音： 歯間摩擦音の保持
b. 母音： 二重母音の長母音化

(2) 形態的特徴

a. 代名詞：

独立人称代名詞	sg.	pl.
1	ana	ihna
2 m.	inta	intu
2 f.	inti	inten
3 m.	hū	hummo
3 f.	hī	henne
接尾人称代名詞	sg.	pl.
1	V+ni, N+i	ne
2 m.	ku~ok	kom
2 f.	k~ek	ken
3 m.	o~(h)	hom
3 f.	he	hen
指示代名詞	m.	f.
this	ða~hāða	ði~hāði
that	ðāka~haðāka	ðike~haðike
these	ðell	ðellet
those	ðallāka	ðallāket

- b. 名詞 複数形：ħormε (sg.) / ħarīm, ħoromme (pl.)
名詞の双数形の保持：walad (sg.) / waladēn (du.)

参考文献

- Nishio, T. (1992) *A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbālī Tribe (Southern Sinai)* - *Studia Sinaitica I*-. ILCAA, Tokyo.
(にしおてつお、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手)